

I. 研究報告

【資料調査部】

1. 長崎市原爆被爆者の死亡統計

1. はじめに

被爆者と非被爆者における昭和45年から昭和59年までの15年間の死亡について死亡構造の年次変化を検討した。

2. 対象及び方法

昭和45年4月1日から昭和60年3月31日の15年間における死亡数は、表1に示したごとく17,498名であった。被爆者とは、長崎市被爆者健康手帳保持者である。非被爆者は、長崎市衛生統計年報の死亡数より被爆者死亡数をさしひいたもので19,182名であった。観察期間を5年毎の3区分に切って比較を行った。主要死因（悪性新生物、脳血管疾患、心疾患、肺炎及び気管支炎、高血圧性疾患、肝硬変、老衰）の性・年齢別の死亡割合を算出した。検定は、マンテル・ヘンツェル検定を用いた。

3. 結果及び考察

各死因の死亡割合の年次推移を図1（男性）及び図2（女性）に示した。

1) 悪性新生物の死亡割合の年次推移

男性について被爆者、非被爆者共に年次の推移につれ増加傾向を示した。昭和45年から昭和49年の死亡割合は、被爆者25.5%、非被爆者20.4%で両者の差は有意であった。 $(p < 0.05)$ 。年次と共に増加する程度は非被爆者が大きく、女性についても同様の傾向であった。

2) 脳血管疾患の死亡割合の年次推移

男性について被爆者、非被爆者共に年次の推移につれ減少傾向を示した。女性についても同様の傾向であった。減少の原因として、循環器対策としての検診、減塩指導、血圧管理などによる予防が考えられる。この点に関しては、より詳細な解析が必要である。

3) 心疾患の死亡割合の年次推移

男性について被爆者、非被爆者共に増加傾向を示した。女性の被爆者における増加が目立った。老年人口の増加が先に進んでいることを窺わせる。

4. まとめ

被爆者全体の死亡構造は、高齢化と共に変化してきており、悪性新生物にかわり心疾患が増加してきていること、脳血管疾患は減少してきていることがわかった。また、女性の被爆者における心疾患の増加が目立った。死亡構造の変化をより正確に分析するために、距離別の死亡率に関する検討を行う予定である。

[本研究は、第30回原子爆弾後障害研究会（平成元年6月4日、広島市）において発表した。]

表 1. 年次, 性別死亡数

	被 爆 者			非 被 爆 者		
	男	女	計	男	女	計
昭和45~49年	2874	2655	5529	3419	2742	6161
昭和50~54年	2899	2981	5880	3438	2619	6057
昭和55~59年	2919	3170	6089	4097	2867	6964
合 計	8692	8806	17498	10954	8228	19182

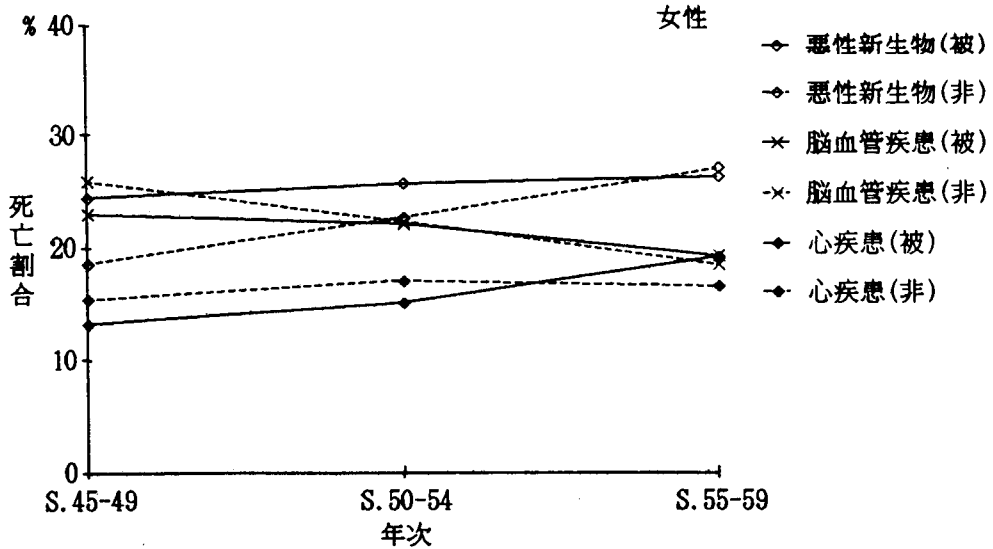


図 1. 各死因の死亡割合の年次推移 (男性)

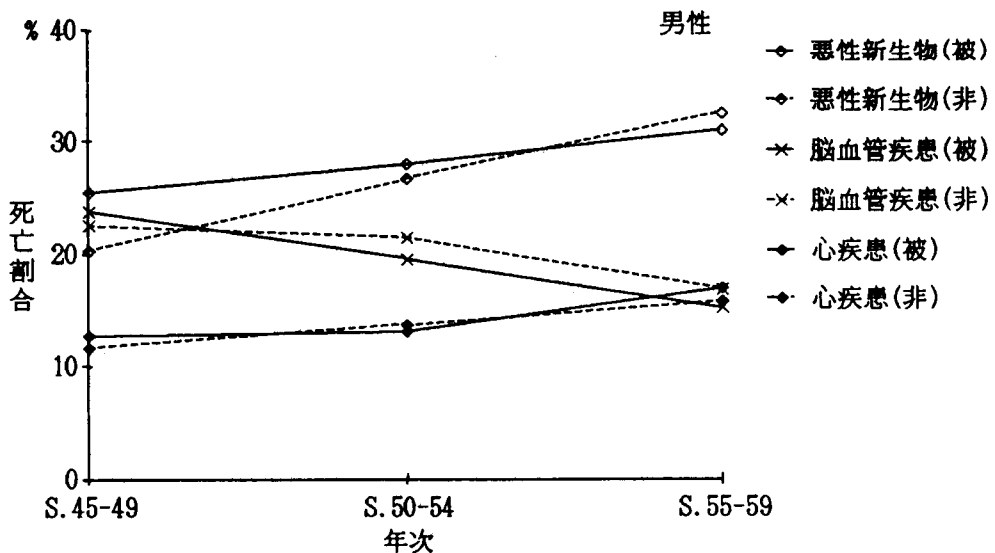


図 2. 各死因の死亡割合の年次推移 (女性)